



気になるあいつ  
わかぎゑふ

双葉社

## 技能賞

今回の写メールはうちの旦那の写真である。強面のメイクをしているのは「お願い」という芝居のためだった。大正時代の女郎屋の親父の役なので、こんなメイクになったわけだが、しかし…。眉を剃り、傷を描き、赤鼻のメイクをしている彼を見たら「ああ、これが私の旦那か」とため息の出る日もある。

彼は芝居に合わせて、自分を変化させるのが大好きだ。アンケートなどに「どこに出ているのか分かりませんでした」と書かれると「やった！」と喜ぶタイプである。

役者には彼のように、化けて喜ぶタイプと、自分が見られて喜ぶタイプの二通りある。どちらも目立ちたがることに变りはないが、裏表になっっているようだ。商業演劇と呼ばれる芝居では主役はどこから見ても目立って、分らないといけない。

例えば高橋英樹特別公演というような名前の付いた芝居なら、出てきただけで高橋英樹と分らないと成立しないように出来ている。仮に高橋英樹が化けることに快感を覚えて、どこに出てるのか分からないくらい化け込んでしまったら、見に来たおばさん達はパニックになる。

「え？ 英樹どこに出てるん？」と言って、客席で喋りだす人が続出するだろう。高橋英樹は高橋英樹という看板を守るために、それ用の芝居をしないとイケないわけだ。

その点、我々のような小劇場の面々は顔が売れるよりは、芝居でどこまで化けられるのか？ そんなことばかり考えている。おかげで世間の

には売れないが、精神的には楽だ。いつもトライしてられるのはいいことだ、と思ってる人種だからだ。

で、うちの旦那はその最たるものらしく、どこまでも化けることに快感を覚える。おかげで、ある歌舞伎役者さんに、

「大ちゃんは（旦那の呼び名です）いつも技能賞だな。本当にどこに出てるのか分らないよ」

と言わしめた。本人はそれを聞いて大満足だった。

しかし、おかげでお客には、名前もいまだに覚えてもらえない状況が続いている。個性派と技能派、花と実。どちらも役者には必要なのだが…さてさて自分の旦那である場合はどっちであってほしいと思うべきだろうか…？

ともかく、私の希望など聞かない人なので、今現在は眉を剃ったヤクザが、家をうろついているような感じの毎日を過ごしている。

---

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇団」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。

---